

## ヨブ記14章14節「死ぬと、生き返るのか？」

### 1A 人生のはかなさ

1B 短い人生

2B 定められた寿命

### 2A イエスにある解答

1B 眠った者たち

2B 復活の命なる主

### 3A 聖徒の死

1B 体の着替え

2B 地に落ちた種

3B 変態

### 4A 不条理にある報い

## 本文

ヨブ記 14 章を開いてください。今日は午後、11 章から 14 章までを読みますが、今朝は 14 章 14 節に注目したいと思います。

人が死ぬと、生き返るでしょうか。私の苦役の日の限り、私の代わりに者が来るまで待ちましょう。

私たちは今、ヨブの友人たちがヨブに話しかけ、それにヨブが答えている議論を読んでいます。前回は、ビルダデという友人が神の正義について語り、ヨブは、その正しい神に対してどのようにして自分の潔白さを訴えることができようかという葛藤を言い表している部分を読みました。そして今は、ツォファルがヨブに対して語った部分に入っています。ツォファルが、他の友人二人以上にヨブを辛辣に批判しました。彼は、ヨブの受けている苦しみは、本当は受けなければいけない苦しみ以下であるとまで言いきりました。

そこでヨブが反撃しました。彼らがいかに知恵のない者か、能なしの助言者であるかを言い放ちました。そして彼らの助言を退け、神のみに目を向けて、自分が何の罪を犯してこのような苦しみにあっているのかを問いかけています。

### 1A 人生のはかなさ

そして、14 章においてヨブは、新たな悩みを話すのです。それは、この地上における人生は短く、はかないということでした。ヨブは地上でこれだけの苦しみを受けていて、この地上で何の報いがあるのかと悩みました。この病の進行を考えると自分が死ぬのも近いだろうと予期していました。ですから、死んでからよみがえるということでもなければ、今、生きている意味がないではないかと

思うのです。

## 1B 短い人生

14章 1-2節を見てください。「女から生まれた人間は、日が短く、心がかき乱されることはいっばいです。花のように咲き出では切り取られ、影のように飛び去るとどまりません。」人生の短さをよく表しています。モーセが詩篇の中でこう言っています。「私たちの齢は七十年。健やかであつても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。(90:10)」モーセ自身は百二十歳まで生きましたが、当時から平均寿命が七十歳から八十歳にまでなっていたのでしょう。ちなみに世界の長寿国と言われる日本では、男が79.94歳、女性が86.41歳です(2012年の統計)。

ですから、私が四十歳になった時に「人生の半分を過ごしたのだ。」という強い思いがしました。自分の住んでいる区からは無料定期検診の用紙が届きますし、自分の体は衰える方向に行っているのだと思いました。実はイエス様を信じた十九歳の時から、「死ぬ時にはどのような言葉を残せるのだろうか。」ということを考えながら生きていました。つまり、死ぬことへの準備ができるだけ、見通しができる短い期間であると思います。

そして、この地上に生きていて、人生における生きがいを見出すことのできる使命や事業というのは、その短い期間で成し遂げるのはあまりにも足りない、少ない時間です。何か意味のあることをしようと思いきや、この人生の期間では成し遂げられないことに気づきます。人生は、砂漠の中で泉をようやく見つけたと思って、そこから水を組み上げたら、水瓶が壊れてしまったのに似ているかもしれません。ようやく意味や意義を見出してやり始めようと思ったら、もうおじいさんだった、あるいは病気にかかった、というような人生です。

## 2B 定められた寿命

しかもこの短い期間は、神によって定められています。5節を見てください、「もし、彼の日数が限られ、その月の数もあなたが決めておられ、越えることのできない限界を、あなたが決めておられる…」先ほど読んだ詩篇90篇は教えています。12節を読みます、「それゆえ、私たちに自分の日を正しく数えることを教えてください。そうして私たちに知恵の心を得させてください。」自分の日を正しく数える、つまり、どのようにして残された日数を用いていけばよいのか、よく考えて生きなければいけないということです。永遠の目的以外のため、神の御国のこと以外のために用いていくことは無駄になりますよ、ということです。

ところで詩篇90篇でモーセは、自分の日を数えることを教えてくださいと祈ったのは、神の怒りの文脈の中で語っています。つまり、人は元々、永遠に生きるように造られたのに、アダムが罪を犯したことによって死ぬように定められている、そこに神の怒りが現れている、ということです。したがって突き詰めると、私たちは生きることについて、「永遠のために造られているのに、たった70

年、80年の期間しか与えられていない。」という過酷な環境の中で生かされていると言ってよいのです。

これでは刹那的になってしまいます。「どうせ死ぬのであれば、今、この時を楽しめばよいではないか。」と思うわけです。パウロもコリント第一の手紙で、「もし、死者の復活がないのなら、『あすは死ぬのだから、さあ、飲み食いしようではないか。』ということになるのです。(15:32)」と言いました。昔、幕末に「ええじゃないか」という民衆の騒ぎがありましたが、私たちも、「今のことだけ考えていれば、ええじゃないか。」「今の仕事のことだけ考えていれば、ええじゃないか。」「ファッションやグルメのことだけ考えていれば、ええじゃないか。」「スポーツ鑑賞に興じていればええじゃないか。」というように、世の中が不安定になればなるほど、「今のことだけを考えておこう」となってしまうのです。

しかしヨブは、真面目な人でした。彼は正しく、潔癖な人でした。この矛盾から逃げることなく、体当たりして、「どうして齢は短いのですか？死者が生き返りさえすれば、今、生きていることも報われるのに。」と神に問うたのです。

## **2A イエスにある解答**

覚えていますか、ヨブの実存的な問い、つまり自分の存在をかけて神に投げかけている疑問は、そのままイエス・キリストの現われを待ち望む叫びになっていることに気づきます。エリファズに対するヨブの言葉には、自分の苦しみの重みが自分の罪の量りよりもはるかに重いという思いがありました。それに対して、キリストは自分には全く罪がないのに、罪をすべて背負い込んだ苦しみを味わったというところで、ヨブの問いの答えになっていました。そして、ビルダデに対する答えの中で、「正しい神の前でどうやって自分の正しさを証明できようか。」という問いに対しては、「二人に手を置く仲裁者がいてくれれば」という言葉をヨブは投げかけていましたが、イエス・キリストが神と人との仲介者であるということで、その問いの答えになっていました。ゆえに、イエス・キリストの内にあること、このことそのものがすべての解決になるということでした。

そして、今朝のヨブの問いに対しても、イエス様が、「わたしがいのちで、よみがえりです。」と言われることによって答えになっています。

## **1B 眠った者たち**

エルサレムからさほど遠くないベタニヤにおいて、ラザロが死んでしまった話を思い出しましょう。ヨハネによる福音書 11 章にあります。イエスと弟子たちはユダヤから離れていましたが、ラザロが病気ですという知らせを、ベタニヤから持ってきました。ラザロは、マリヤとマルタの兄弟です。マルタとマリヤからの使いですが、彼女たちは、「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。(3 節)」と言いました。しかしイエス様は、マルタとその姉妹とラザロを「愛して」、なおのこと二日、そこに留まっておられました。そして、それは確信的でした。ラザロが死んだことがはっ

きりさせるように、敢えて二日留まられたのです。

これは、とんでもないことです。イエスは三人を愛しておられないどころか、意地悪で、裏切り者で、人をただ弄ぶだけのナルシストではないかという非難をされても構わないような仕打ちです。そしてこれこそが、ヨブが叫んでいた訴えでありました。神は、私を祝福し、その楽しみを味あわせてそれから苦しみ合わせ殺すようにしている、意地悪な方であるという訴えでありました。

しかし、それは一時的な見方でしかありませんでした。イエス様は、「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。(4 節)」と言われました。死が終わりであれば、まさにヨブの言っている通りです。しかし、死だけで終わらないのです。イエスは弟子たちに対して、「わたしたちの友ラザロは眠っています。(11 節)」と言われました。眠っている？もちろん、死んでいるのです。しかし、死んでいるのに生き返るのであれば、その死は一時的であり、ゆえに眠っているのと同じであると形容しています。

## 2B 復活の命なる主

そしてイエスが来られたことを知ったマルタが、走っていきイエス様を責めました。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。(21 節)」しかしイエスは言われました、25-26 節です。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」ヨブの苦しみに対して、イエスはそのよみがえりの源となっております。

ここで、「死」の定義について考えましょう。「死」について、また「命」について多くの人が間違った考えを持っています。死のもっとも基本的な考えは「別れている」であります。そして命は「結ばれている」であります。肉体の死は、魂が肉体から離れたことを意味します。私たちはこれを、病院の脳波モニターを見れば確かめることができます。反対に、私たちの魂が肉体と結ばれている時に、その肉体は生きているということが出来ます。

そして、私たちは「霊的な死」を考える必要があります。これは、自分の魂あるいは意識が、神から離れているならば死んでいる、ということです。肉体から意識あるいは魂は離れていないので、肉体は生きていますが、けれども自分の思いは、神に対するものはなく、自分だけで生きている、神はいない、とするのであれば、その人は生きているけれども、霊的には死んでいるのです。もう一つの死もご紹介します。それは「永遠の死」です。死後に神から裁きを受けます。世の終わりに復活し、最後の審判において神によって有罪の宣告を受け、火と硫黄の池に投げ込まれ、そこで永遠に神と離別していることを、永遠の死と言います。黙示録 20 章では「第二の死」とも呼ばれています。

もう一度、ヨハネ 11 章 25-26 節を見てください。25 節の言葉、「わたしを信じる者は、死んでも

生きるのです。」でイエス様が仰っている「死」は肉体の死のことです。肉体は死んでも、復活の体をもって生き返るということです。そして 26 節の言葉、「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」で、「死ぬことはありません」は霊的な死のことです。肉体が生きているうちにイエス様を信じれば、神と共に生きること、御霊によって神に結ばれているその命は途切れることはないという、永遠の命の約束です。

ですからヨブ記 14 章に戻りますと、ヨブの泣き叫びに対して再び、イエス・キリストご自身が命となり、復活となってくださることによってその空洞を埋めてくださるのです。私たちが、まだクリスチャンではない方々に永遠の命について話すと、「そんなに長く生きたくない」という答えをいただくのですが、永遠の命とは、今の困難で、また空しい生活が永遠に続くということではなく、むしろ自分が生きていることの矛盾、あまりにも生きている期間が短く、それなのに意味ある人生を送りたいと思ってしまうその葛藤に対する、究極の解答が永遠の命なのです。

### **3A 聖徒の死**

#### **1B 体の着替え**

キリスト者にとって、肉体の死は終わりではありません。もっと具体的に、明確に聖徒の死について聖書は説明しています。詩篇では、「主の聖徒たちの死は主の目に尊い。(116:15)」とあります。どのように尊いものなのか、パウロがコリント第二 5 章でこう述べています。「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。私たちはこの幕屋にあってうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのちにのまれてしまうためにです。(5:1-4)」

肉体と復活の体を着物のように喩えています。肉体を脱ぎ捨てて、復活の体を身につけるのです。本当の私は、この肉体ではありません。私がこの肩腕を切り捨てても私は残ります。私のどこを切り捨てたら私ではなくなるのでしょうか？ そう考えていくと、私はこの肉体ではないことが分かります。私の本質は霊であり、その霊が目で見える形で表現するために肉体があります。それを着替えるようにするのが、キリスト者にとっての死であります。

さらに、パウロは今の肉体を「地上の幕屋」に喩えています。今でもイスラエルでは、ベドウィンという遊牧民が天幕あるいはテント暮らしをしています。私たちが想像しやすいのは、野営のテントでしょう。そして後に与えられる復活の体を「天からの住まい」と言っています。イエス様が弟子たちに言われました、「わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。(ヨハネ 14:2)」私たちは、キャンプの時にテント暮らしはなかなかいいです。けれども、ここにずっと住みたいと思わないでしょう、自分の家に戻って、ゆっくりとしたいです。御霊によって新しくされた霊は、アダムから引き継

いでいるこの肉体は一時的には良いが住みにくいと思っています。何よりも、ここには罪の DNA が組み込まれているからです。だから新しい霊によって、神の思いを抱いている者にとっては、絶えず肉との戦いがあるのです。しかし、天からの住まい、復活の体は、新しい、神に結ばれた霊にカスタムメイドされた体であります。キリストに似た者と変えられ、霊も体も正真正銘の神の子供となることができるのです。

## 2B 地に落ちた種

そしてもう一つの表現が、コリント第一 15 章にあります。ヨブは、14 章 7-10 節において、木は切られてもまた芽を出すけれども、人間は死ぬと倒れたきりだ、と言っています。けれども、キリストの復活によって、実は人間も他の植物の命と同じように、死んでもよみがえる真理があるのです。コリント第一 15 章において、パウロがこう説明しています。「ところが、ある人はこう言うでしょう。「死者は、どのようにしてよみがえるのか。どのようなからだで来るのか。」愚かな人だ。あなたの蒔く物は、死ななければ、生かされません。あなたが蒔く物は、後にできるからだではなく、麦やそのほかの穀物の種粒です。しかし神は、みこころに従って、それにかからだを与え、おのおのの種にそれぞれのからだをお与えになります。(35-38 節)」イエス様も、種は落ちてしななければ実を結ばないと言われたように、私たちの肉体は一度死ぬことによって、初めて新しい体、復活の体を与えられるのです。

## 3B 変態

そして同じく 15 章でパウロは、こう宣言しました。「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラツパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラツパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。(51-52 節)」変えられる、という言葉は、さなぎから蝶に変態するというのと同じ言葉が使われています。その変態が、私たちの体にも起こるのだということです。私たちの肉体はさなぎのようであっても、たちまち栄光の体、蝶のようになるのです。これは、主イエスが戻ってこられた時に起こります。戻られる前に死んだ者はよみがえることによって、まだ生きて残っている者は、死を見ることなく一瞬にして変えられます。

## 4A 不条理にある報い

そしてパウロはこの希望をもって、15 章を「堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだではないことを知っているのですから。(58 節)」としめくくっているのです。無駄に終わらないのです。たとえ、苦しみがあっても、不条理な状態に自分が置かれていても、復活の希望があります。自分がこの地上で行っていることについて、この地上で報いがなくとも、来る世にその報酬が用意されています。死んで終わりではないから、かの世で報いがあるからこそ、この日を生きる勇気が与えられます。神の国の報いを信じることは、現実逃避なんかではありません。その反対です、現実直視であります。神から与えられた数少ない日々を、永遠の視点から、永遠の報いを期待して立て直すことができるのです。